# カトリック高松教区報

2008年11月9日（第126号）
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:tkcuria@mxi.netwave.or.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

## 知恵を出し合い協力宣教司牧を進めよう

### 高松教区民各県のつどい開催

高松教区長　溝部　脩

四県合同のつどいと各県でのつどいが、高松教区では隔年に開催されています。今年は各県のつどいの年であり、香川県から始まり（九月七日）、徳島県（九月二十一日）、高知県（九月二十八日）、愛媛県（十月十九日）まで終了いたしました。今年は殉教者列福の年に合わせて、四人の講師（シスター片岡留美子、古巣馨師、岡本哲男師、溝部脩司教）を招いてそれぞれ違った視点から殉教者の生き方を学びました。午後はいずれも共同司式ミサで締めくくられました。殉教者の生き方を通して、現代に生きる私たちに彼らが投げかけるメッセージをしっかりと受け止める必要性を感じたつどいでした。殉教者たちを美化したり、英雄視したりするのではなく、彼らがどのように生きたか、どのように死を受けとめたかを、私たちがしっかりと学ぶことがとても大切だと理解しました。シスター片岡は、女性としての生き方の素晴らしさを語って下さいました。古巣神父は昔の教会の姿を余すところなく見せて下さり、現代の教会に欠けていることを指摘しました。岡本神父は四国における宣教の困難さを語り、現代も困難が伴う四国の宣教の現実の前に決してたじろいではいけないとの力強いメッセージがありました。

愛媛地区のつどいでは、子どもの分かち合いに参加され、子どもたちからの質問に、他の話も交えながら丁寧に答えられた。（10月19日愛光学園聖トマス寮にて）

関連記事3ページ

同時に今年の四県に共通なテーマは、現在高松教区が取り組んでいる協力宣教司牧を促進し、司教、司祭、修道者、信徒がともにつくる教区という目標を掲げました。ゆっくりとした歩みですが、少しずつ教区全体を網羅する宣教司牧の態勢にしたいと思っています。多くの人の知恵を出し合って、より良い自分たちの教会づくりを目指すことが大切です。

**特集記事**

2～3面
高松教区民各県のつどい
4～9面
ワールドユースデイ参加体験談

## はばたき

『子は親の鏡』これは、アメリカの教育者ドロシー・ロー・ノルトの詩のタイトルです。子育てのヒントが数多く示された著書の中に見られる詩ですが、ここに言う親子は、神と教会、さらには我々信徒との関係とも読めるのではないでしょうか。子を育てる親にとっての戒めのみならず、育てられた子の側が意識すべき心得と解釈してみては如何でしょう▼太陽と月の関係にも似ています。ただし、月を眺める第三者の位置によって、月の見える形が変化することに要注意です。親子は、社会の中に生きているのですから。つまり、信徒による宣教です▼本号をもって、私の当コラムの担当は終わります。今回の「日」・「月」を含め、七曜をテーマに（些かこじつけ気味なのもありましたが）私の職にも絡め、駄文を認めてきました。一緒に考えて頂きたく、敢えて様々な引っかかりも残しておきました（言い訳）。これも試験的な鏡です。一年間のご愛読に対し、そして貴重な機会を与えて頂いたことに対し、心よりお礼申し上げます。神に感謝。

# 2008年教区民のつどい各県大会

## 香川地区大会
### 列福の意義を学ぶ

桜町教会　長谷川聖

「教区民のつどい香川地区大会」が、九月七日（日）桜町教会で開催され、香川県下の各教会から司祭・修道者・信徒二百数十名が集まった。午前中は、長崎教区古巣馨神父の講演（子ども十数名は別プログラム）、昼食休憩後、午後は溝部脩司教司式の派遣ミサに与った。

古巣神父は、「殉教者を育んだ教会～では、私たちはどうすればよいのですか～」と題した講演の中で、殉教者の列福の意義について、①私たちが「ご覧下さい、これが私たちの教会の信仰です。」と叫ぶことができるように。②ペトロ岐部がザビエルの列聖に立ち会い、その目撃者・証人としての使命を果たしたように、私たちも立会人としての使命を果たすために。③一八八殉教者が私たちの背中を後押しし、この現実という枠を超えさせるために。そして④私たちが「福者よ、では私たちはどうすればよいのですか」と祈り、耳を澄ませば、福者は必ず答えてくれる。と述べられた。

また、殉教者を育んだ教会の姿について、①小さい子供でさえ、自分の意思で神を選ぶように育てた教会。②貧しさと謙虚な神の働きを受けたザビエルの霊性を、その底流としている教会。③泣く人たちに居場所を用意した教会。④みことばを宿した教会。⑤聖体を深く生きた教会。⑥赦しを激しく求めた教会。と一つ一つ例をあげながら教えられた。

午後の派遣ミサでは、溝部司教が「教区民のつどいは、教区民が神の民として一致していることを表している。聖霊の導きのもとに司祭・修道者・信徒が一緒になって知恵を出しあい、どんな教会をつくりたいかを考え、決定していけば、教会は必ず一歩前に進む。これが『協力宣教司牧』である。高松教区が掲げる『宣教』という目標の実現のために、知恵を出し合い、一緒に祈りあい、一緒に成長していこう。私たちの教会をどんなものにしたいか、真剣に考えよう。」と話された。

古巣神父講演（桜町教会聖堂にて）

## 徳島地区大会
### 小笠原みやを中心に当時の信仰教育を学ぶ

徳島教会　滝澤英一

九月二十一日日曜日に教区民のつどいが徳島教会で行われました。午前十時から十二時までは、高松教区信徒研修会・徳島県の部の最終回として長崎純心大学のSr片岡瑠美子教授に講演をいただきました。昼食は全員でお弁当をいただき、午後一時から二時までグループに分かれて分かち合い。二時から、溝部司教様によるミサに与り、教区民のつどいを終了しました。

昨年、一八八人の殉教者の内、特にディオゴ結城了雪神父について学びましたが、今年は他の殉教者について深く学ぶ機会を得ました。午前中の講演は、「列福をひかえ、ともに祈る7週間」に入る前の、直前総仕上げ学習になりました。高い俸禄を投げ打って、二十一年間貧しい生活に甘んじながらも信仰を損なうことなく、最期は奉公人四人ともども殉教した一家の母、小笠原みやを中心に、当時のクリスチャン教育について、史料を解説いただきながら、分かりやすく講義をしていただきました。当時の信者が、おそらくは家庭にあっても要理（どちりなきりしたん）を勉強していたであろうに、自らを省みますと、勉強不足を痛感しました。

午後の六つのグループに分かれての分かち合いは、どのような気づきを得ているか、感じたかを、小グループの中で徳島教会の方を始め、鳴門教会・阿南教会の方からも率直にお聞きでき、自分の信仰を振り返る機会になりました。

列福式を控えて、カトリック教会の目が殉教者に向かっています。過去、殉教者は特別な人、という意識があり、また禁教・殉教という歴史教育の中から、クリスチャンは偉い人、という周囲からの目もありました。殉教者の勉強を進めて、殉教者は生来の超人ではなく、後生（＝ごしょう＝永遠の命）を得るために神様が導いて下さった、支えて下さった、という説明をいただき、一つ納得できました。殉教者の生活・当時

溝部司教司式ミサにて

の社会状況を学び、殉教者を身近に感じる事ができました。

すばらしいパンフレットを作って下さった方、お弁当を手配下さった方、お茶を用意下さった方、成功をお祈り下さった方、多くの方々に支えられ、実りの秋に、収穫の多いつどいとなりました。感謝申し上げます。

## 高知地区大会
## 四国の教会の歩みを学ぶ

安芸教会　山口　幹

二〇〇八年九月二十八日、赤岡町の弁天座（芝居小屋）を主会場として、教区民のつどいin高知が開催されました。

最初は、七月にオーストラリアのシドニーと八月に山中湖で開催されたワールドユースデイに参加された青年達の報告がありました。

次に、ドミニコ会の岡本哲男神父様の四国の教会の歩みの講演、そして香南市のかたりべ（野村土佐夫さん）による浦上四番崩れとそれに関わる赤岡町の歴史の講演。神父様や修道士達が命がけで、四国に宣教された事が分かりました。

弁天座（昨年七月オープンの芝居小屋）での講師陣

又、現在の日本の教会に在籍する外国人達を、どのように受容し、育てていくかということも考えなくてはいけないと、岡本神父様は提案されました。

講演の後の質疑応答の中で、溝部司教様は協力宣教司牧が大切である事を強調されました。

その後、赤岡教会に移動して、溝部司教様と七人の神父様によるミサが行われましたが、フィリピンの人達によるタガログ語の賛歌や手話付きの聖歌も有り、約八十名の参加で盛会裏に終わりました。

## 愛媛地区大会
## 殉教者の霊性に学ぶ

郡中教会　今泉洋子

「愛媛地区教区民のつどい」は十月十九日、「殉教者の霊性に学ぶ」をテーマに県下各地から約二百四十名が松山の愛光学園の施設につどいました。

「子ども、青年、大人、修道者も参加する教区民のつどい」を目指して準備をすすめました。

午前中は司教様の講話をいただき、午後は、八つのグループに分かれ十月五日から始まっている「列福をひかえ、ともに祈る7週間」を分かち合いながら日本の教会全体と心を合わせて祈る時を持ちました。

約二百四十名の参加者で、溝部司教講話会場は満員に

子どもグループの分かち合いには司教様が参加されましたが、

・神さまはどうやって、死んでしまった人たちを天国につれて行くのですか

・司教様は天国がどこにあると思いますか

・神様はだれが作ったんですか

・司教様は神様をどのくらい信じていますか

・どうして司教になったのですか

・司教様はどんな人ですか

など、子どもたちから出された質問は十七にもなりましたが、それに一つ一つ丁寧に答えられました。

また、「ワールドユースデイin山中湖」に参加した青年六人が堂々と参加報告をしました。その成長した青年達の姿に感激し、育ててくださった方たちのご努力に感謝しました。

最後に、愛媛地区九教会の信徒と愛媛で働いてくださっている司祭全員が司教様のもとに集まり、捧げられた司教司式ミサに強められ、殉教者の血によって引き継がれた、日本の教会の一員として、教会が何をしなければならないか、一人一人が何をすべきかよく考え、社会の中で福音を伝えていくための力をいただきました。

## 司祭異動

十月一日付け司祭異動は次のとおり

土屋和彦師
「坂出小教区担当司祭」兼「香川県西讃協力宣教地区モデラトール」

乾　盛夫師
「徳島協力宣教司牧地区モデラトール」兼「徳島県地区長」

諏訪榮治郎師
「高知協力宣教司牧地区モデラトール」兼「高知県地区長」

注　新設の香川県西讃協力宣教地区は、坂出、丸亀、善通寺、観音寺の各小教区。
高知協力宣教司牧地区には、新たに赤岡及び安芸小教区を加える。

# ワールドユースデイ特集

シドニー大会（7月9日～22日開催）を「WYDS」と、山中湖大会（8月14日～17日開催）を「WYDJ」と表記を統一しました。執筆者に所属教会を掲載していないのは未洗者です。

## すごい!!　聖霊の働き

Br八木信彦

ワールドユースデイ日本版（以後ＷＹＤＪとします）実行委員長就任の依頼を受けたとき、すでにスタッフの間で、ＷＹＤＪを素晴らしいものにしようとする一生懸命さのあまり方針のずれや隔たりがあり、また実行委員約二十名のメンバーは、聖職者、社会人、社会人青年、学生と色んな異なる分野から集まっていて、ある意味で大変な部分もありました。それでもそのことを特に気にすることもなく、わりとためらうことなく実行委員長を引き受けたように思います。でも、第一回目の実行委員会が近づくにつれて、段々と引き受けたことの後悔の念が強くなっていきました。東京近辺の青年や委員の皆さんのことはほとんど面識がないし、二百人規模の大会に参加者としても参加したことがなく、ましてその責任者なんて…というように、日々不安や心配が増していき、おまけに地方の一修道士が、そんな大役を引き受けていいのだろうかという否定的な思いも募っていき、とんでもないことを引き受けてしまったという思いがとても強くなっていきました。

ただ、その行事の規模は、自分の限界や才能をはるかに超えるものだし、また実行委員をまとめていくことは、自分の力だけではどうにもならないと最初から感じていたので、聖霊に委ねるしかないと腹をくくっていました。聖霊に委ねれば何とかなるという気持ちが、さきほどの否定的な感じとは裏腹にどんどん満ちていきました。テーマも聖霊だったので、準備の段階から聖霊を中心に置きさえすれば、いい大会になるのではというささやかな期待がありましたが、そのささやかな期待が徐々に確固たる確信に変わってきたことを覚えています。とにかく聖霊を中心に置けば、ばらばらのものを一つにつなげてくれるし、あったかいものにしてくれる…、そうするためには逆に、聖霊に委ねるしかない、そしてその聖霊の働きに協力するのみ、この方針で行こうと覚悟を決めました。

終了後実行委員長の胴上げ

聖霊が中心であること…、これだけは外さないように、忘れないように自分に言い聞かせ、「聖霊助けてください」の祈りを日々繰り返していました。そのおかげでしょうか、準備期間の終盤頃から、大会当日も、聖霊に守られて必ずいいＷＹＤＪになるという確信めいたものが自分の気持ちの中でふつふつとわいてきました。事実、実際にそうなったように思います。本当に初めから終わりまで聖霊に助けられっぱなしだった気がします。

そうであるならば、ＷＹＤＪ終了後も聖霊が助け続けることでしょう。ある意味でＷＹＤＪの終わりが本当の始まりです。テーマである「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてわたしの証人となる。」この実現がこれから始まっていきます。後に続く参加者の原稿を通して、そのことを理解されるでしょう。

## 「何処に居ても一人ではない」を忘れずに

高知県　石橋章洋

あれからもう一月半が経過しました。今あの四日間を振り返ってみて、参加できたことが本当に良かったと思っています。それは、文章や言葉では言い表せるものじゃないぐらい充実した日々でした。この四日で私はもっと深く神様やイエス様の事を知りたいと思うようになったし、勉強したいと思いました。それから聖書を読みたいと強く思うようになりました。

高松教区からの参加者

沢山の仲間にも出会うことが出来ました。この仲間と出会うことが出来たのも自分が行きたかったからというよりもやっぱり神様に自分は呼ばれて来たんだなぁとその時感じていました。

「何処に居ても一人ではない」

この言葉を忘れないように私も日々仕事や勉強を頑張りたいと思います。

## 聖霊を身近に感じられたら

聖マルチン病院　小笠原由美

今回、初めてＷＹＤＪに参加しました。何も分からない、知らない状態での参加で不安でした。

しかし実際に会場に行くと同じグループのメンバーや他の方も温かく迎えてくれました。分からないことは分かりやすく教えてくれました。

今まで全くと言っていいほど考えたことのなかった『聖霊』について自分なりに考えられたように思います。私がＷＹＤＪに参加したこと、そして多くの仲間に出会えたこと…全てが聖霊の働きであったのではないかと思います。

まだまだ知らないことだらけですがこれから少しずつ勉強していけたらと思います。そしてもっと聖霊を身近に感じられたらいいなぁと思いました。

これからは祈りの心を持って生活していきたいと思います。

## ～思いやるということ～

中島町教会　井上貴世

私にとってＷＹＤＪは、感謝をすること以外のことは浮かんできません。

初日、車に酔ってしまった私は到着す

るなりその場に座り込んで動けなくなりました。そこで溝部司教様に支えていただき、また一緒に参加した高松教区の仲間に両横を支えられ何とか受付近くのベンチに辿り着いたことだけはうっすら覚えています。そして気がつくと、受け付けまでも済ませてくれていました。以降四日間、体調があまり優れずたくさんの人に迷惑を掛け続けました。

徒歩巡礼の日、思いました。初日から何もかものプログラムにまともに参加できていない自分が悔しく、また惨めでした。どうして私はここにいるのか、こんなに周りの人に迷惑を掛けてまで参加した意味は一体何なのだろうか、と。休んでいるときに涙が流れるのを感じました。

二百人の参加者

「帰りはバスに乗ったほうがいい」そう言ってくれる仲間の言葉を振り切って歩いて帰りました。我ながら頑固だとは思いましたが、どうしてもやり通したかったのです。しかし、このおかげで私は何か吹っ切れたような気がしました。みんなと歩くことができてよかったです。幼い頃から、よく聞いた『神様はその人に乗り越えられない試練は与えない』という言葉が頭をよぎりました。この葛藤は、私に与えられた一つの試練であったのだと。

私はＷＹＤＪに参加して、たくさんの聖書の言葉や司教様・神父様方の言葉だけでなく、思いやるということを体感して帰ってくることができました。まともにプログラムに参加できず、落ち込んでいる私に温かい言葉をかけてくれたこと、言葉などの壁を取り払って分かち合おうとすること、相手を分かろうとする心。そして他教区の青年との繋がりができたこと。人を思いやるということ、そういう心を持つことが大切なのだと改めて感じました。

高知に帰るとすぐ、次の日から仕事でまたいつもの日常が帰ってきました。うんざりすることもたくさんありますが、どんなときでも祈りの心を持って、神様の声を受け止めながら生きていくことができればと思っています。

このような機会を与えてくださった神様に感謝の気持ちでいっぱいです。本当に実り多い四日間で、言葉では言い表すことができません。私は四日間を通して、本当に人の温かさと優しさに触れ、普段見失っていたものを取り戻すことができたように思っています。

本当にありがとうございました。

私の名札の裏に書かれていた言葉。『希望は私たちを欺くことがありません』この言葉は私をとても勇気づけてくれるものとなりました。体調が思わしくなかった自分、しかし休憩しながらでもやり遂げられたことで希望の光が見えました。本当に希望は私を欺くことがなかったと。残念ながら同じ言葉の書かれた名札を持った人に出会うことはできませんでしたが、いつかどこかで出会えると信じています。離れていても私たちは「信仰」の下に繋がっていると思えるからです。「この広い空の下　出会った私たちは神の子」最後の日の派遣ミサで共に歌った『フレンズ』の歌詞のように。

## 祈りたいと思う心が聖霊の働き

郡中教会　本田浩規

私は、二日目の平賀司教様のカテケージスや分かち合いを通して、聖霊について学びました。それまでは、聖霊は私たちに力を与えてくれるものだと思っていました。しかし、カテケージスや分かち合いによって、より深く知ることができました。聖霊は、私たちと共にいてくれます。祈りたいと思う心が聖霊の働きであることを学習しました。聖霊の力によって、色々な行動ができるように努力します。

ＷＹＤＪに参加して、多くの良い経験ができたのは、神様はもちろん送迎してくださった武田さん・濱口神父様・他の参加者・家族・郡中教会の信者の方々のおかげです。本当にありがとうございました。

## 責任感というプレッシャーの中で

高知県　田本晋吾

私にとってのＷＹＤとは、今の青年活動へのきっかけとなった三年前に参加したケルン大会でした。今回のＷＹＤＪでは、ＷＹＤケルン大会と同様に、高知中島町教会の主任神父だったジュード神父様が同じグループのメンバーにおられ、参加当初、三年前の原点に戻ったような不思議な気持ちでした。しかしながら、参加したグループ十七では班長だったことや最終日の派遣ミサを高松教区が任されていることなど三年前のＷＹＤに参加していた気持ちとは違い、参加期間中、責任感というプレッシャーを感じていました。特に、他の班での班長のリーダーシップや各教区での担当プログラム内でのアレンジなど比較、意識してしまっていました。このような想いや考え方を持ち始めてしまっている自分自身に気付き、振り返る機会を設けて下さったことが、私にとってのＷＹＤＪでの聖霊の働きだったのではないかと考えています。最後になりますが、ＷＹＤＪへ多くの青年が参加できるようご支援頂いた神父様や信徒の方々に御礼申し上げます。

最終日の派遣ミサにて

## キリスト者として生きるために

番町教会　河合　香

「父と子と聖霊の御名によって。アーメン」これは私たちが三位一体の神を信じ、キリスト者であることを証する大切なしるしです。しかし、普段の私の生活は、キリストを信じる者としての生活とは懸け離れたものだと思います。私は本当に弱い存在です。楽な方に流され誘惑にも簡単に負けてしまいます。

しかしそんな私でも神様は見捨てず、共に一緒にいて下さる。一人一人に用意された使命、それを果たす為の力となるもの、聖霊を常に送ってくださる。

聖霊、これがＷＹＤＪに参加して受けた恵みでした。

ＷＹＤＪが行われた四日間は本当に濃い、濃密な時間でした。青年の集いやネットワークミーティングといった所属教区、また全教区を対象とした集いとは違う、「信仰」の水にとっぷりと浸かっていたような四日間です。全てのプログラムを通して「カトリック者として生きるとはどういうことか」、「聖霊とは何なのか」といった問いかけが、司教様や神父様を通じて神様から投げかけられているように感じました。

共同祈願

ＷＹＤの四日間は聖週間の再現の意味があります。プログラム三日目片道で十キロの巡礼、これはイエス・キリストが十字架を担がれ、苦難のうちに歩まれたこと、そして十字架に掛けられた苦しみの再現です。その後、キリストの犠牲を思い自分の罪を見つめ直す、ゆるしの秘跡とミサが奉げられました。その日の夜にはキャンプファイヤーを囲んでのフェスタ、つまり復活の徹夜祭が行われ、四日目の派遣のミサでプログラムが締めくくられました。それと共にカテケージスがあり、そこで頂いた言葉は他のどの場所、どの経験でも得られることの出来ない輝きに、目が覚めるようなものでした。

カテケージスを通じて私は「自分自身に与えられている使命」について考えるようになりました。この視点はそれまでの自分にはなかった、全く新しい視点です。以前の私はミサにあずかっている時や青年活動に参加しているときなど、教会の内にいる間は強く自分の中の信仰を意識していましたが、それ以外の、生活の大多数を占める学生生活・家庭生活といった場面では、信仰やカトリック者である自分を意識していませんでした。そもそも自分自身の中で信者である自分とそうでない自分を区別して認識していました。

しかしその考え方は誤りでした。自分は不可分なもので、分けて考えることは出来ない。そして信仰を持つものとして生きることを、神様は望んでおられる。そのための力を聖霊として注いで下さっている。アイデンティティの一致と聖霊、これはゆるしの秘跡を通して私が得た恵みです。このことを知ったからこそ、私はこれから、自分自身に与えられた使命について考えて行かなくてはならないと思うようになりました。

ＷＹＤＪには、若い私たちへの神様の沢山のメッセージが鏤めてあったように思います。同じプログラムを受けても、一人ひとりが受け止めたメッセージ、恵みは様々です。そして不思議なことにそのメッセージはそのとき私たちが最も必要としていた、欠けていた部分を補うものだと思います。そして、その恵みを受けた私たちは、それを種に花を咲かすべく進んでいかなくてはいけません。派遣のミサの際、溝部司教様が仰ったように、十年後、二十年後に輝くような人生を歩んで行けるように。

## 自分とゆっくり向き合うことができた

番町教会　河合　恵

「みなさんがＷＹＤＪに参加したのは、聖霊によって導かれたからです。」平賀司教様、Br八木さんがおっしゃった言葉です。ＷＹＤＪでは聖霊についての分かち合いや、自分としっかり向き合う時間が多くあり、とても充実した集いでした。

普段の生活では、聖霊について考える余裕が自分の中にありません。しかし、そういう日常こそ、落ち着いて神様の声（語りかけ）を聞くというのがとても大事なのだと思いました。神様の声は聖書を通して聞くことが出来ると平賀司教様がおっしゃいましたが、私は教会以外では聖書をあまり開きません。でも、すぐ身近にある聖書から神様の声に耳を傾けられるので、これからはきちんと聖書を開く時間をとりたいと思います。

もう一つ印象的だったのが「ＭＩＳＳＩＯＮ」という言葉です。神様からのＭＩＳＳＩＯＮを笑顔で感じ取ること。また、そこから神様が聖霊を注いで下さると、幸田司教様が話しをして下さいました。私は神様からのＭＩＳＳＩＯＮが何なのか分かりませんが、分かった時は笑顔で迎えられるようにしようと思います。

最後に心に残っているのは三日目のゆるしの秘跡です。その際溝部司教様が自分の心の奥底にある問題を見つけるヒントとして、「人と人との関わり」「神様との関わり」「自らを確立する信仰」「どのようにゆるしの秘跡を受けるか」の四つ下さいました。

自分と真剣に向き合うことは怖く、逃げ出してしまいそうになりますが司教様の言葉を聴いて、冷静に向き合うことができ、ゆるしの秘跡が終わった後は経験したことのない開放感を感じました。

この他にも十キロの徒歩巡礼、最終日のフェスタなど思い出に残るイベントを経験することが出来ました。

ＷＹＤＪではたくさんの仲間に会い、いろんな人と交流することができましたが、何より自分とゆっくり向き合えられたのが一番良かったです。

次回も必ず参加したいと思います。

## 日々の生活の中で　何を見て気付き証ししていくのか

松山教会　桑田高明

この度は各教会関係者の方々の懸命な奉仕活動、その原動力となった現在に至るまでのＷＹＤの歩みとその存在、何より全ての源である主の恵みにより、山中湖におけるＷＹＤＪへと参加する事が叶いました。

大会に於いては、主要テーマである「聖霊」の働きとそれを証しする我々について考察するカテケジス、徒歩による巡礼、焚火を囲んでのフェスタ等々の多様な催しが行われましたが、四日間に渡るこれらの活動の日々は、集いを形成する青年達の熱気も相俟って、興奮と充実の内に瞬く間に過ぎ去ってしまったように思われます。

このような単体の教区にとどまらない大規模な交流は、日常のミサと異なる味わいを持ったものであり、また、より広範囲における信徒間の直接的な交流と言う観点から見ても、有意義なイベントである事は疑いようがありません。

しかし、頭の中でそれを理解しつつも、今回のＷＹＤＪにおいて私は「信仰に基く一体感」を得る事が中々難しくありました。

始めこそは普段と異なる外部環境が故にそう感じるのだとの思い込みがありましたが、全体を振り返るにつれ、その違和感のような物の本質は自分自身の内面的な脆弱性から来ている事に気付かされる結果となりました。

つまり、ＷＹＤＪと言う「他力」に期待するあまり、言動に自身の意思や信仰を介在させる割合を低くしたまま、この大会に臨んでしまったと言う事です。

ミサの中でのカテケージス

これは、私自身の中に置かれた、キリスト者としての歩み方、教会共同体のあり方、または隣人への理解、そして社会生活と言ったものに対しての認識の持ち方に、改善するべき課題が幾つも残っているであろう事を浮き彫りにしてくれました。

この機が与えられた事に感謝しつつ「聖霊の息吹は全てのものに宿る」の意識のもと、日々の生活の中で何を見て、気付き、そして証して行くのか、改めて考えて参りたい所存です。

## 世界中のカトリック青年と共に

伊予三島教会　薦田健太郎

このたび、ＷＹＤＳに参加させていただいた薦田健太郎です。

ＷＹＤに参加したのは今回が初めてなのですが、たくさんの非常によい体験をすることができました。

僕は伊予三島教会に通っているのですが、あまり信者さんの数は多くなく、特に若者はほとんどいません。ＷＹＤに行ってみるまでは、青年のつどいなどには参加したことがなく、そのような集まりがあることすら知りませんでした。出発前、最初に気づいたのは、『日本中にカトリックの若者がいて、みな気力にあふれている』ということです。それはオーストラリアについてからは『世界中にカトリックの若者がいて～～』に変わりました。

みんなでミサを作り上げることの素晴らしさ、世界中の若者たちと一つの場所で同じミサを分かち合えることの感動を毎日得ることができました。今まで歌ったことのない讃美歌を知ることもでき、それを皆で歌うことで喜びや感謝を捧げ、みなで分かち合うことができました。なかでも今回のテーマソング「Receive the power」は一番印象に残りました。

たくさんの新しい出会いがあり、友達ができ、それは僕の人生のなかでかけがえのないものになりました。なかまができることで、喜びも悲しみも、そして何気ないことでも楽しくなりました。四国にも青年のあつまりがあり、それにもたびたび参加することができるようになって、近頃は非常に有意義なカトリック生活を過ごしています。

WYDSの参加者

ＷＹＤ最後の日、ランズウィック競馬場で野宿をしたのですが、そこで僕は偶然日本グループとはぐれてしまいました。しかしそのおかげでパパ様を五メートルほどのところに見ることができ、写真も撮ることができました。他にも素晴らしいお導きがありましたが、これもなにかのお導きかと思います。

今回の体験を一生忘れず、これからの信仰生活をより豊かにすごしていこうと思います。

最後に、このようなＷＹＤを作り上げてくれたかたみんなに感謝を捧げます。

本当にありがとうございました。

神に感謝。

## ゆるしの秘跡に

松山教会　門田　啓

今回、私がＷＹＤＪに参加して最も印象に残ったことは、日本全国にこれほどのカトリック信者の青年がいることでした。

当初は、このような大人数の中、初日のカテケージス後のプログラムに参加できるのか、本当に心配でした。しかし、プログラムが始まってみれば、班の人たちや韓国の人たちと驚くほどに馴染むことができました。

一番思い出に残ったのが、「ゆるしの秘跡」でした。沈黙の後、神父様のところへ行き、自分の罪を告白して神様のゆるしをいただいたときは、心から喜び、うれしさのあまり、涙がとめどなく流れてきました。これもすべて、聖霊の導きと御恵みのおかげであると感謝しています。

今回は本当に参加できてよかったです。

## たくさんの人を愛したい

徳島教会　伊藤雅子

ＷＹＤＪに参加して、本当に良かったです。ブラザー八木がフェスタの時に、私たちに歌って下さった「君は愛されるため生まれた」が印象に残りました。

私は病院で介護の仕事をしていますが、山中湖から帰ってきて、患者さんにやさしい気持ちになれる自分に気づきました。寝たきりで話せなくて、こちらの呼びかけに何の反応もない人でも、この人も愛されるために生まれたんだなと思って、やさしい気持ちで介護することができます。

ＷＹＤＪに参加して、私は神さまに愛されているんだなと思いました。そして、たくさんの人を愛したいと思いました。

## 静かに自分自身を見つめ　振り返ることができた

大阪・高槻教会　三野由香子

今回、高松教区の青年の皆さんと参加させて頂く事ができ、この事は私の中でとても大きな喜びとなりました。

四国から開催地である山中湖までという長い車中、しかも渋滞があり延着してしまいましたが、バスの中では、ゲームをしたり近くの人と話したりと常に笑いが絶えませんでした。（なかには、疲れて寝ている方もいらっしゃったのにうるさくしてしまいました。すみません。）高松教区の初めて出会う青年の方々が、温かく私を受け入れてくださったこと、だからこそ楽しく過ごせたのだと感謝の気持ちでいっぱいです。

山中湖では、司教様のカテケージス、十字架の道行き、ミサ、往復二十キロの徒歩巡礼、ゆるしの秘跡などがありとても充実していました。

その中でも特に私の中で心に残っているのが徒歩巡礼。そしてゆるしの秘跡。

歩きながら仕事や家族のことなどたくさんの話を今回出会った、友達としました。

十キロ歩いた先には、緑のたくさんある場所で、静かに自分自身を見つめ、振り返ることができました。自分の感じている罪をどのように告白し、ゆるしの秘跡をどう受けたらいいのか迷っていましたが、溝部司教様がヒントを与えて下さりました。おいしい空気をたくさん吸って、ゆったりとした中で過ごすことができ、とても素晴らしい時間が流れていました。自然の中の開放された場所で秘跡を受けることができ、色々なたくさんの思いが溢れて、聞いてもらえたこと、受け入れてもらえたことを感じ、とても嬉しかったです。ここで感じたこと大切にしていきたいと思います。

今回、たくさんの出会いがありました。この出会いが次にまた繋がっていけるように歩んでいきたいです。

帰りのバスの中では、周りは寝ている人が多かったのにも関わらず、ほとんど一睡もせず、ある青年とずーっと話していました。その内容は、自分がこの世に誕生してからの過去はどうだったのか、現在どのように生きているのか、そして将来どうしていきたいのかで、そのことについて分かち合いました。お互いの人生観だったり感じていることを知りとても深かったです。帰るまで巡礼が続いていました。

今まで教会から離れていた自分ですが、現在、不思議なことに教会が近いものになっています。そのことは聖霊に導かれていること、そして働きを感じます。そして何より、溝部司教様や高松教区で働かれている神父様方やブラザー八木との出会いが私にとって、日曜日に行きたい教会へと思いを変えさせてもらい、それは今回のＷＹＤＪに参加することが出来た繋がりだと思っています。

私事ですが高松教区は、両親の故郷であり祖父母や親戚がたくさん住んでいる、大好きな場所だったのですが、今回高松教区の皆さんとご一緒させて頂き、素敵な青年の方々と出会わせていただき更に大好きなところになりました。ありがとうございます。

最後になりましたが、溝部司教様、ブラザー八木、実行委員の皆さま、たくさんの準備をありがとうございました。そして、一緒に行かせて頂いた高松教区の青年の皆さま、濱口秀昭神父様、佐藤神父様、土屋神父様、素敵な思い出を本当にありがとうございました。お疲れの中、往復とも安全に運転してくださった、秀昭神父様、武田様ありがとうございました。

言葉では表現できないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。

また、何かあればご一緒させていただけたら幸せです。

高松教区の青年の皆さまのこれからのますますのご活躍をお祈りしております。

徒歩巡礼

## 祈り…そして派遣

中島町教会　森本美鈴

今年七月のＷＹＤＳに続いて、ＷＹＤＪin山中湖にも初めての参加を果たしました。

私たちが集い、宿泊した東京星美ホーム山中林間寮は、とても静かで緑の木々に囲まれた、自然あふれる中にありました。騒がしい雑踏や車の排気ガス、眩しいネオンとは無縁の心落ちつく雰囲気がとても魅力的でした。全国から集まった青年達は、それぞれ二十二組のグループに分かれました。私はそこで新しい青年達に出会えたことにとてもワクワクしていました。

二日目には歩いて十五分くらいにある、サレジアン・シスターズ修道院へ徒歩で向かいました。私の六グループには大阪、

十字架の道行き

東京、横浜、埼玉、仙台教区と、とりわけ関東の青年が多くいまいした。この二日目のイベントとしては、十字架の道行がとても印象に残っています。初めに、道行の十四留を振り分けます。まずそれをグループで分かち合いました。私たち六グループは第六留「イエス、ピラトに裁かれる（ルカ23・13～18、20～25）」の箇所でした。分かち合ったあとにそれを祈りの形にします。そして、人ほどの大きさの十字架を担いだ一同が、十四に分かれたグループを一つずつ回りながら、それぞれの祈りをみんなで分かち合っていくというものでした。緑の風景の間に太陽の光が差し込んで、雑音のない静けさがありました。風が葉っぱを揺らす音や鳥の声だけが聞こえるというその空間が、神聖な雰囲気で辺りを満たしていました。そんな、ゆっくりと時間が流れていく場所で、私たちはそこに、イエスキリストの姿を見ていたのかもしれません。

夕方には五つの選択プログラムが用意されていました。私は『テーマソングを歌おう』に参加しました。シドニー大会での仲間やここでの新しい仲間、歌を知っている人も知らない人も、楽器隊の演奏に合わせ、一緒になって歌いました。

私が一番好きな時間は、夜ハミガキをする時でした。夜は少し肌寒いくらいで、静かな林の中から虫の音が聞こえてきます。ゆっくり考え事をするには、そんな風景に身を委ねている時がピッタリでした。新しい出会いにワクワクすると同時に、私はいつものことながらコミュニケーション不足も感じていました。この年はＷＹＤＳとＷＹＤＪと二つの初めてを経験しました。それらに参加することに私自身、多少のリスクもありました。『なぜ、参加したのかわからない。本当は参加するつもりではなかった』という、私を含めほかの青年達の意見に対して、神父様やブラザーはよく、『例えそうでも、神さまの導き（計画がある）があったからこそ、ここに集められた』といったことを聞かせてくれたのでした。

三日目の朝。徒歩巡礼の日です。私はみんなより一時間早く用意をして、食堂二階に用意されたお御堂に向かいました。話が前後しますが、ＷＹＤＳで私は多くのことを考え、学んだつもりでいましたが、帰って来てみればその大半は薄れていました。でも、一つ心に残っていたのは『祈り』でした。私はこの歳になって『祈り』ということを初めて素直に受け入れました。だからと言って、どんな時も祈ることには抵抗がありますが『静かな所で一人でお祈りをしてみたい』という気持ちが自然に起こるようになっていました。

そして、巡礼が始りました。山中林間寮から聖ヨハネ学園までの道のりです。青い空に雄々しく美しく映える富士山も見ることができ、とても感動的でした。九月であるにも関わらず、陽気だけは夏のような日差しを私たちにもたらし、体調を壊す人もいたようですが、みんななんとか目的地に到着しました。そこは、修道院の庭を思いださせる緑の絨毯が広がる場所で、それぞれ昼食を取りながら、ゆるしの秘跡も受けました。その後にミサを受け、また、もと来た道を歩いて巡礼しました。私たちはもちろん、ただ歩いただけではありません。その同じ時間の中で、それぞれ独自の分かち合いをしたのだと思います。そして、疲れた体に鞭打って、一生懸命帰ってきた私たちを待っていたのは、ＷＹＤＪ最後を飾るフェスタでした。

夕暮れのとき、広いグランドの真ん中にキャンプファイヤーさながらに火が灯されました。それぞれ青年達の余興があり、疲れた体においしいご飯、音楽に、交流と楽しい時間が流れていきました。最後の締めくくりは、『主の平和』でした。一つの輪になった私たちは『主の平和』と笑顔で、一人ひとり順番にみんなと握手して回りました。初めて会って仲良くなった人、けっきょく一言も話せなかった人、一緒に歌った人、分かち合いをした人。初めはさまざまな教区が集まってきたという思いが、その時には一つの志しで繋がっている、という気持ちにそれぞれが感じていたと思います。

最終日派遣ミサの閉祭の歌で

次の日、楽しかった、そして意義のある日々が過ぎ、私たちは派遣ミサを迎えました。

ミサの担当は私たち高松教区でした。定番の手話付『フレンズ』を参加者みんなが一つになって歌いました。背の高い木々が生い茂る中での、自然に溶け込んだゆったりと流れるミサでした。そして、溝部司教さまのお話がありました。

この素晴らしい出会いの場で、私たちは参加しただけに留まらず、派遣していかなくてはならない。私たちは現代社会の問題に打ち勝つために派遣され、社会の中で何ができるかを考えることが一つだと言われました。そして二つには、自分の中ばかりみつけるのではなく、人の痛みを聞ける人になる（心の痛みに触れる人になること）こと。これは以前からも言われていたことですが、私たちが毎週参加しているミサも当然、派遣の使命を受ける場であるということです。

ＷＹＤＪから戻りはや一ヶ月以上経ち、こうして振り返ってみて今になってハッと思うことがあります。それは、こうして教えられたこと、考えさせられたことがまた、薄れているということです。自分中心に考える毎日は、大事なことを忘れさせます。

私があえて、教えられたことに付け加えるとしたら『思い返す』ということです。派遣される気持で歩きだした後も、その一日の終わりにでも思い返すことができれば、次の日もまた、その教えを証しする自分がいるかもしれないと考えるのです。

## シルバー師・池田師受賞
### 日本カトリック幼稚園連盟から

去る七月二十九日～三十日に仙台市で開催された日本カトリック幼稚園連盟の全国大会で、阿南聖母幼稚園のシルバー神父様が勤続四十年以上で表彰されました。師は「幼い子どもたちがイエス様の心の中で成長するのはすばらしいことです。今、取り入れているモンテッソーリ教育は画一的に上から子どもたちを教えるのではなく、一人ひとりの成長に合わせて手助けするというやり方です」と話されました。

また、同大会で、高松聖母幼稚園（日本カトリック幼稚園連盟前委員長）の池田義高神父様も幼児教育功労者表彰を受賞されました。同師は受賞の謝辞で、アインシュタインの言葉『私は如何なるものも自分の功績にしません。何故ならすべてのことは、その終わりも始まりも共に、私たちのコントロールできない力によって決定されているからです。～後略～』を引用して「私はこれからも、み摂理の妙なる調べに併せて、踊り続けたいと思います」と話された。

## 編集後記

今号は、高松教区民各県のつどいの特集とＷＹＤの特集号といたしました。毎号の主な記事は割愛させていただきました。

# お知らせコーナー

## 主な司教日程

11月２日(日)音楽による黙想会（番町）
　４日(火)司祭評議会
　５日(水)～６日(木)
　　ミラノ宣教会管区集会参加
　８日(土)カトリック老人施設協会全国大会（香川）
　12日(水)諸宗教平和懇話会
　21日(金)宣教司牧評議会
　22日(土)～29日(土)
　　列福式前後と教皇特使接待
12月２日(火)司祭評議会
　３日(水)溝部司教霊名の祝日
　７日(日)キリシタン史研究会（上智大学）
　13日(土)ドミニコ会司祭叙階
　15日(月)～16日(火)
　　召命担当の集まり（長崎）
　24日(水)降誕祭ミサ（桜町）
　28日(日)中村教会

## 投稿記事募集

【テーマ】
テーマは、特に定めません。

【投稿要領】
字数は３００字以内（写真歓迎）
「所属教会名、住所、氏名」明記のこと。
中傷・誹謗はご遠慮下さい。
原稿はできるだけメールで送って下さい。
写真もデジカメで撮影したものはメールで送って下さい。

【投稿先】
メール：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
郵　便：〒760-0074
高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当
ＴＥＬ：087-831-6659
ＦＡＸ：087-833-1484

## 新しい宣教の場～桜町マンション購入～

事務局長　西川康廣

責任役員会（９月１９日）は高松教区の新たな宣教司牧の場として、司教館北側に面した桜町マンションの一室を購入することを決議した。資金には、「教区活性化基金」を充てる。

マンションには谷口広海（助祭候補）夫妻が居住し、室内には礼拝所と集会所を設け、司祭とともに教区のために働き、日々の活動には近隣教会信徒の養成と祈りの場として用いることになる。

## 列福式参加者の健康安全の心得

列福式には大勢の方が参加されます。各自の健康と安全に気をつけ、参加者の皆様は次の点にご留意くださいますようお願い申し上げます。

１．保険証または保険証のコピーを持参してください。
２．日頃服用している薬は忘れずに持参し、服用してください
３．かかとが低い靴など、履きなれた靴や日頃使用している杖を持参してください。
４．天候に注意し雨具の準備をし、傘は式典が見えにくいので、できればレインコートを用意してください。
５．朝食、昼食を摂ってから式に参加し空腹の状態で式に参加しないでください。
６．事故発生や気分が悪くなった時は本部または近くの救護班にお知らせください。
　式当日の救護本部（１階１塁側屋内練習場）
　電話番号　０９５－８４５－６２２２
７．救護所や救護班の位置は前もって確認しておいてください。
８．入場許可証の裏面に氏名、年齢、連絡先、治療中の病気等を記入してください。
９．気分が悪くなってトイレに行く時は、トイレで倒れることが多いので必ず、周りの人に付き添いを依頼してください。
１０．気分が悪くなったら無理をせず、救護所で休んでください。

列福式実行委員会救護部